

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	28 / 2010 / 29-31
タイトル	2010年のグダリ沼 -2009年・湧水量の増加から又一転減少へ-
著者名	小山内孝

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

2010年のグダリ沼 -2009年・湧水量の増加から又一転減少へ-

顧問 小山内 孝

2009年のグダリ沼

昨年、2009年は、グダリ沼にとって大変不思議な年でした。それは、グダリ沼の湧水量が年々減少し、浅くなってきているのではないかと実感していたものが、年末には大幅に増水し、バイカモが沼一面に広がり、雪の中に緑のじゅうたんを敷き詰めた様な風景を呈していたからです。

その昨年のグダリ沼の経過を、石郷岡総一郎さんの写真「やぶなべ」第27号の写真から再掲し見てください。(写真1~5)

湧水の部分がやや盛り上がり渦状に見え、10数カ所見えます。

源流部分では転石が露出し、その石上には水辺に生育する水生ゴケがびっしりとついています。浅くなった水中には、タニゴケ(蘚類)も見られます。(写真6)



[写真1] グダリ沼 2009.6.7



[写真2] グダリ沼 2009.6.28



[写真3] グダリ沼 2009.7.20



[写真4] グダリ沼 2009.9.20



[写真5] グダリ沼 2009.10.12



[写真6] グダリ沼の湧水部(2009)

2010年のグダリ沼

2010年11月6日には再び源流部での湧水の減少は相当なもので、一部「せせらぎ」のような様相を呈していたのです。水温は7.3℃(2010.10.2)でした。

水辺の転石をひっくり返すと、目立つのは、ユスリカの仲間の卵塊がどの転石にも見え、まだ成虫も見られました。この卵塊は2008年6月にも産卵されていました(写真11)。膨大な量の水生昆虫の発生が予想されます。

最近、放牧牛は見られなくなりましたが、1980年代には、約1,600頭ほどの牛が放牧され、岸辺は、牛の水飲みのため、泥でなだらかだったものが、放牧中止後の現在はハイコヌカグサやコヌカグサ等、コヌカグサの仲間の草本が土留め役をはたし、土手みたいな状況に変化してきています。

そのハイコヌカグサ(陸生)が水中では、忍者の様に三型に変化しているのです。これらが本当に同じ種なものかはっきりしないので、細井幸兵衛氏に見てもらいました。ハイコヌカグサは、すこぶる多様な種で水湿地に生える型は、葉身が大きくなるが、水中のものは多型になるとの同定結果でした。(写真7~9参照)

- ① 水中の中に没し、流水に長く伸びているものは、根も白く(長さ約30cm)茎は赤褐色長いもの約180cm近くにもなっています。
- ② 水中に浮いているものは流れに乗って長くたなびいている。
- ③ 水中で、流れの緩やかなところではハイコヌカグサは、浮島状の塊になって、10月でも花穂の跡が付いていました。

それにしても中流部分では、バイカモよりかなり殖えています。

10月と11月の水生生物の調査では、流水に、イワナがかなり見られましたが、放流されているニジマス姿は見られませんでした。

プラナリア類では、カズメウズムシが少なくなっています。採集してきた中には、ミヤマウズムシ、キタシロウズムシ、トウホクコガタウズムシなどは確認されたものの、ナミウズムシは見あたりませんでした。



[写真7] ハイコヌカグサが浮かぶグダリ沼の流れ。(2010.11.04)



[写真8] 水面に穂を出したハイコヌカグサ。(2010.11.04)



[写真9] 陸上のハイコヌカグサ。(2010.11.04)



[写真10] 今年は開花の見られないバイカモ。(2010.11.04)



[写真11] ユスリカ卵塊。(2008. 06. 21)



[写真12] 湧水量の減少が著しいグダリ湧水部。
写真6も参照。(2010. 11. 04)



[写真13] せせらぎとなって流れるグダリ源流部。
(2010. 11. 04)



[写真14] 初冬を迎えたグダリ沼。(2010. 11. 04)

水生昆虫の「モンキマメゲンゴロウ」や、アブ、トビケラ、カワゲラ等の仲間については、山道忠郎さんが別に報告する予定です。

ここ約10年の経過では、水生動物については、種の多様化の方向ではなく、ナミウズムシが見られなくなるなど、逆に少なくなっているのではないかと考えています。

最後に今後のグダリ沼の調査と環境保全について以下の様な方針を提案して見たいと思います。

第一には、湧水量の定期的継続調査の必要。かつては、日量20万tとも言われており、市の調査では、グダリ沼、駒込川、合流部付近での流出量は、

1972年10月…68.084t/日

1972年11月…94.263t/日

とある。現在の湧水量はどの位なのだろうか、また、沼の水質の調査も必要である。牛の放牧中止後の飲料水としての適否、大腸菌等。年3回位は必要。

第二には、水生生物調査を上流部だけでなく、合流部まで数年かけて調査する必要がある。

第三には、観光客等の立ち寄りが多くなっているため、踏跡が多く、きちんとした遊歩道(木道)などの整備が必要。

第四には、今後の状況によっては、「ハイコヌカグサ」など、流水中の帰化植物の除去対策も考える必要がある。

第五には、「スギナモ」、「バイカモ」、「オオタカネバラ」、「ミヤマホツツジ」等の保護対策も必要ではないか。

以上の他、「グダリ沼の自然を保全する理由」などを書いた説明板(立て看板)が必要ではないか。